

第1章 戦場

樺太からの引き揚げ

つらいつらとばかりの思い出

佐々木昌利さんのお話から

○塔路 表紙裏地図

私は、小学二年生の昭和二十年（一九四五年）、樺太で終戦を経験しました。当時、私は、樺太の炭鉱地帯だった恵須取郡塔路町に、両親と私と兄と姉の五人で住んでいました。

樺太は、寒いところで、夏でも二十度を超えることは年に何日もありません。その寒さのせいで、樺太では、果物は全然できませんでした。米も穫れません。穫れるものは、大根、芋、ニンジンで、いわゆる短い期間にできるものしか穫れないのです。カボチャは絶対にできませんでした。ガラスで囲ってもだめでした。当時は、バナナを食べてみたかったです。外国から輸入してくるのですが、樺太まで来ると、すっかりしなびてしまって、バナナの格好をしていないのです。

九月に入ると、霜が降り、十月の中ごろになると雪が降り始めます。冬は、大体、マイナス二十度です。寒いと思うと、マイナス二十八度ほどになっていました。冬になったらもう夜通し火をたかないと寝ていられません。そうしないと布団がちがちに凍ってしまうのです。ただ、雪は北海道のように降りませんでした。積雪は、せいぜい三十センチから五十センチぐらいのものだったと思います。

樺太の木は、葉っぱの広いものはほとんどなく、多くが松の木です。それらの木から松葉が落ち、積もってふわふわになります。それが何年かかかって腐って土になるのです。

山火事が起こることがありましたが、その原因のほとんどが木と木がすれ合っただけの自然発火

○国民学校 昭和十六年（一九四一年）の国民学校令というきまりにより、これまでの小学校を改めて成立した教育機関。

○B 29 第二次世界大戦末期に登場したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。一万余メートルの高高度を飛んだ。北海道以外の日本空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島・長崎への原爆投下にも使われた。

○コンソリデーテッド 第二次世界大戦時のアメリカの主力大型爆撃機。

○疎開 子どもや病人、お年寄りなどを戦争の被害の受けやすい地域からより安全な場所に移り住まわすこと。

でした。ぼんぼん燃えるのですが、そのうちに雪が降ると消えてしまいます。ところが、火は雪の下ですつと燃え続けているのです。そのため、翌年に雪が解けて、少し暖かくなると、また燃えはじめるのです。

当時の学校は、国民学校という名称でした。音楽の時間に先生は、オルガンを使って、ばーつと音を鳴らして、「この音は何という飛行機ですか。」と言うのです。「はい、B 29です。」と私たちは答えました。するとまた、ばーつと鳴らすと、今度は「それはコンソリデーテッドです。」と答えていました。こんなことばかりを勉強していました。

私が小学校に入学した頃はソ連が攻めて来るとは思ってもいませんでした。そのソ連が攻めてきたのは、戦争が終わった八月十五日の一週間くらい前だったでしょう。学校へ行つたところ、「ソ連が攻めてくるからすぐに家に帰りなさい。」と言われて、もう慌てて帰りました。

その次の日に、塔路町の住民全員で疎開しました。そろそろと、何百人も何千人も



イメージ図

焼夷弾から逃げる人々

で夜通し移動いどうしました。夜中に「休め。」と言われ、私たちは座すわって休んでいました。そうしていたら、飛行機が飛んできたのです。日本の飛行機だろうかと思って見ていました。

飛行機も攻撃こうげきされるのが恐おそろしいのか、大砲たいほうが当たらないくらいの高さを飛んでいました。

すると、縄なわみたいなものに火がついたものがぱっぱっぱっと落ちてきました。照明弾と爆弾ばくはつでした。落下後、五、六秒で

ぱーっと爆発ばくはつすると、夜中でも昼間くらいの明るさになるのです。おそらく、何か攻撃こうげきの目標があったのだと思います。

弾たまが当たったら当然死ぬわけですから、その時は、もう恐おそろしくて、恐おそろしくて仕方ありませんでした。即死そくしすればまだ

いいですけれども、足に当たったとか手に当たったとなると、だれも治療ちりょうすることもできないのです。お医者さんもないければ薬もない。仮かりに病院があったにしても、医者も逃にげていないですから、死ぬのを待つだけという格好かっこうです。

疎開そかいしている最中では、とにかく食べ物こまに困こまりました。生で食べられるのは大



イメージ図

夜間に飛行する飛行機

○バレイシヨ ジャがいも

○炭鉱 石炭を採掘するために掘った穴。石炭鉱。

○宗谷丸 当時、稚内と樺太の大海を結んでいた連絡船。

根、ニンジンです。バレイシヨは水くさくて食べられません。食べるものがないため、逃げていなくなった農家に入って何か食べるものはないかとあさって食べた経験もあります。

当時、二十代、三十代の男の人はみんな兵隊にとられていました。四十代の男の人も、本州の炭鉱に連れていかれて石炭掘りなどをさせられていました。ですから、残ったのは年寄りとお母さんと子どもだけです。私の父は、年をとっていたので残されていましたが、ほとんどがそのような状態です。そのため、逃げる時、自分もいつ死ぬか分かりませんから、久春内の北の珍内というところにあった、大きな川に、子どもを投げたという人が何人もいました。

昭和二十二年（一九四七年）に私たち家族は樺太から引き揚げてきました。引き揚げる時は、真岡から船で函館まで来ました。結構、日数がかかりました。宗谷丸という船だったので、余り大きくない船で、船酔いしないつもりだったのですが、ひどい目に遭いました。

函館に着いてからは、親戚のところに行きました。当時、そこにも余り食べるものがなかったのですが、せっかく来たからといって、わざわざ米の御飯を炊いてくれました。そうしたら、しばらく食べたことがなかったからかみんな下痢になってしまいました。

何かと理屈をつけければ戦争が始まるのですけれども、被害者のほとんどは一般人なのです。何の罪もない無防備な人間がやられるということが多いものですから、なるべく一日でも長い平和をまずお願いしたいと思います。

つらいことばかりの思い出

DATA

平成21年度豊平区平和事業
聴き取り
・平成21年8月5日
・つきさっぶ郷土資料館



佐々木昌利(ささき・まさとし)さん

・昭和12年(1937年)生まれ
・札幌市豊平区在住